

日米大学間の COIL (GLE) 型授業の実践と課題

全 炳徳 (長崎大学教育学部)

Yuki Miyamoto (DePaul University, USA)

1. はじめに

日本学術振興会が主催する大学の世界展開力の強化事業 (Inter-University Exchange Project) ¹⁾ が 2011 年度からスタートしている。2018 年からは日米間の大学を中心とした COIL 型 (Collaborative Online International Learning) 授業が事業の一つとして開始された。この「COIL 型」授業とは言葉通りネットが繋がっているオンライン上で授業を成立させるもので、アメリカのニューヨーク州立大学 (State University of New York : SUNY) で 2006 年に発足した授業設計案をベースとしている ²⁾。COIL 型のようなオンライン上の国際交流授業のモデルは様々あり、例えば、アメリカ・シカゴ所在の DePaul 大学では同じようなオンライン上の国際交流授業を GLE (Global Learning Engagement) プロジェクトと名付けている。そこで、今回は COIL 型授業を GLE としても併記している。

本報告では COIL (GLE) 型授業実践の一環として実施した、長崎大学と DePaul 大学間のグローバル国際交流授業について報告し、その可能性と課題等について考察する。

2. COIL (GLE) 型授業とは

COIL (GLE) 型授業について野田 ²⁾ は「ICT を活用して、オンライン国際連携学習を行うだけのものではない」と断言する。続いて、COIL (GLE) 型の授業の特徴として次のように説明している。COIL 型授業の斬新さの一つは ICT を活用して単発の楽しい交流をするものではなく、連携や協働を強調した「協働・共同プロジェクト型の授業をアクティブラーニング」までに昇華させることである。もう一つは様々な理由で海外留学ができない人々の多文化理解とレディネスを育むことである。最後の特徴としては COIL (GLE) 型授業を通して多文化共生の難しさと重要さに気づくことである。

SUNY では逸早くから COIL (GLE) 型授業を提示し、独自のカリキュラムを公開している。それにはアメリカ独自の留学生問題を抱えていることが原因の一つである。アメリカは他の国に比べると留学生の受入は多く派遣は少ない歪さがある。近年のグローバル化に対応し、それに相応しい人材の雇用を生み出すためには多文化や多様性への対応能力が必要である。SUNY では ICT を活用したオンライン上の国際連携学習 (Collaborative Online International Learning : COIL) を対策として提案し、世界的に展開している。

SUNY の COIL 型授業モデルは「①Ice Breaker (お互いを知るためのタスク)」「② Comparison and Analysis (お互いの国や文化を知るためのタスク)」「③ Collaboration (協働して何かを作り出すタスク)」の三段階の活動を、例えば、A 国と B 国が同様に受講科目として開設し、授業を実施するものであるとしている。これらの COIL (GLE) 型授業には様々な ICT ツールが用いられており、教育機関の独自のシステムに加え Skype や Zoom, Google Hangouts などの映像や音声を同期するものから、Facebook や Blog, Line などのテキストベースの非同期型 SNS などが利用されている。

3. 長崎大学と DePaul 大学との COIL (GLE) 型授業について

3.1 ワシントン DC での COIL (GLE) 型授業の準備会合

COIL (GLE) 型授業は前述したように幾つかの教育機関では長い歴史を持っているものの、日本においては目新しい授業の一つである。2018 年から日本学術振興会によりスタートした COIL 型授業の支援はこれからの国際理解授業を見据えたモデル授業の展開と言える。このための、初めての開始ワークショップがワシントン DC の ACE (American Council on Education) ホールにて、2018 年 10 月 24 日から 26 日までの三日間の日程で実施された。COIL (GLE) 型授業の在り方をはじめ、これから展開するであろう COIL (GLE) 型授業の内容、プログラムの詳細を詰める会合であった。長崎大学はアメリカの DePaul 大学とペアとなり参加をした。その中で、これからの予定として長崎大学と DePaul 大学の間で、以下の 2 科目の COIL (GLE) 型授業を実施することを計画し、その第一段階として「多文化を超えた原爆の倫理的論争」を今回、実験的に授業実践を行った。

- 多文化を超えた原爆の倫理的な論争 (全 炳徳担当、本授業報告内容)
- 日米文学と通訳から学ぶ言語力 (鈴木章能担当、今後の実施予定科目)



(a) 概要説明の様子



(b) ワークショップの様子

写真 1 ワシントン DC の ACE ホールで行われた COIL 型授業の会合様子

3.2 長崎大学と DePaul 大学との COIL (GLE) 型授業の概要

今回 COIL (GLE) 型の授業実践としては、長崎大学と米国のシカゴ所在の DePaul 大学との間に、①2018年9月26日(水曜日)から2018年11月7日(水曜日)の6週間に掛けてのオンライン上での Zoom セッションを、②2018年11月26日(月曜日)から2018年12月10日(月曜日)までの2週間の、対面授業を実施した。そのため、長崎大学と DePaul 大学との COIL (GLE) 型授業は前述の SUNY が提示したモデルとはやや異なるものである。それはオンライン上での授業と対面授業を取り入れた複合型の、COIL (GLE) 型授業実践と言える。

3.3 DePaul 大学と長崎大学との COIL (GLE) 型授業の詳細

授業内容は、1945年以降の広島と長崎の原爆投下に対する倫理的な対応を探りながら、原爆談話を構成してきた政治的、社会的、そして倫理的・宗教的な構造を調査することからスタートした。特に、この歴史上の出来事に関しては日米間で解釈が異なる理由についての質問を加え、国民の物語、記念の儀式、そして個々の証言がどのような形で構成され、広められてきたかを調べる段階を踏むように授業設計を行った。

また、両方の国で原子爆弾がどのように語られているのかを調べ、特にこの授業では知識の欠如についても疑問を投げかけ続けるように授業設計を行った。国際関係に関する核兵器についての最近の議論にも触れ、核兵器についての我々の一般的な知識、数多くの核実験、核弾頭の数、そして不思議に思われる限られた事実等を確認するようにした。このようにして、この授業を受ける学生たちが、現在の状況の激変だけでなく、核兵器についての一般的な知識の理解と乖離を埋めることに努めるようにした。また、そのような情報のギャップがどのようにして、またなぜ存在するようになったかの議論も容易に取り組めるように設計した。その意味では、今回の授業実践では原子爆弾の歴史的観点からの破壊力とその影響を含む幅広いトピックと分野を網羅するようにしている。

表 1 COIL (GLE) 型授業の概要 (DePaul 大学の Dr. Yuki Miyamoto による)

Overview	Detail Contents
Instructors	Yuki Miyamoto, Ph.D. DePaul University Byungdug Jun, Ph. D. Nagasaki University
Course Structures	Autumn Term: Moral Issues across Cultures: Atom Bomb Discourse December Term: Trip to Japan (Nov. 26 through Dec. 10) Winter Term: Hiroshima Nagasaki in History, Memory, and Discourse
Time	Wednesdays 6:00 – 9:15 p.m. in Chicago Thursdays 9:00 – 10:20 a.m. in Nagasaki
Room	Levan Center, Room 401 (Chicago) PC-2 in Faculty of Education (Nagasaki)

表2 COIL (GLE) 型授業の全体日程 (DePaul 大学の Dr. Yuki Miyamoto による)

Date	Reading Assignments	Class Activities	Assignments
Session 1 Sept. 26 <i>Introduction: The Power of the Bombs and American Myths</i>	*Barton Bernstein, “A Postwar Myth: 500,000 U.S. Lives Saved” from <i>Hiroshima’s Shadow</i> *Adam Goodheart, “The Invasion that Never Was” from <i>Hiroshima’s Shadow</i> * Excerpts from Paul Fussell, <i>Thank God for the Atom Bomb</i>	* Compose self-introduction paragraph * Create self-introduction on VoiceThread * Assign discussion leaders from Sessions 2 on.	* By next week, submit the self-introduction to the instructor
Session 2 October 3 <i>Road to the Bombs—Japanese Myths</i>	* Yui Daizaburo, “Between Pearl Harbor and Hiroshima/Nagasaki” from <i>Living with the Bomb</i> * Excerpts from Saburo Ienaga, <i>The Pacific War: 1931-1945</i> .	* Video, <i>Fog of War</i> (dir. Errol Morris, 2003). * Discussion on the readings * Preparation for the first zoom session next week	* Submit the self-introduction to the other institution for buddy system * Read the other’s self-introduction
Session 3 October 10 <i>Religious Understanding of the Bomb: Roman Catholicism and True Pure Land Buddhism</i>	* Charles B. Strozier and Laura Smich, “Christian Fundamentalism and Nuclear Threat” * Excerpts from Nagai Takashi, <i>The Bells of Nagasaki</i> * Testimony by Shigenobu Koji (True Pure Land Buddhism priest)	* Video, <i>Unit 731</i> (60 minutes, 1995). * 1 st Zoom session: Self-introduction * Discussion on the readings	* Submit your buddy request by the next week
Session 4 October 17 <i>Gender, Race, and Ethics around the Bomb</i>	* David Mura, “Asia and Japanese Americans in the Postwar Era: The White Gaze and the Silenced Sexual Subject” * Carol Cohn, “Sex and Death in the Rational World of Defense Intellectuals” * Judith Butler, “Introduction,” <i>The Frames of War</i>	* Distribution of the final project proposal instructions * Buddies announced * Discussions on the readings	* Initiate the conversation with one’s buddy at the other institution * Discuss and determine the text for the 2 nd zoom session [D2L Discussions]
Session 5 October 31 <i>For the Greater Good?: Responsibilities of Scientists</i>	* Allen Buchanan, “Judging the Past: The Case of the Human Radiation Experiments” * Sharon Ghamari-Tabrizi, “Book Review: A Cold War Colonial Science” The Atomic Bombing Casualty Commission’s Study of Genetic Mutations in the Children of Atomic Bomb Survivors”	* Orientation from Ms. Erica Rideaux of the Study Abroad Office * Discuss possible discussion questions for the 2 nd zoom session * Discussion on the readings	* Think of discussion questions for the 2 nd zoom session, and run them with one’s buddy
Session 6 November 7 <i>Voices Not yet Heard</i>	* Kouno Fumiyo, <i>Town of Evening Calm Country of Cherry Blossoms</i> * Terry Tempest Williams, “The Clan of One-Breasted Women” from <i>Refuge</i> * Lisa Yoneyama, “Memory Matters: Hiroshima’s Korean Atom Bomb Memorial and the Politics of Ethnicity” <i>Living with the Bomb</i> * Sodei Rinjiro, “Were We the Enemy?: American Hibakusha” <i>Living with the Bomb</i>	* 2 nd Zoom session to discuss on <i>Town of Evening Calm Country of Cherry Blossom</i> * Examine the final itinerary * Discussion on the reading	* Work on the final project proposal, consult one’s buddy

戦争の歴史、平和、そして核兵器の正当性に加えて、さまざまな倫理的・宗教のおよび哲学的な伝統が精査されるように配慮した。また、授業には日米の学生同士の議論を促すよう努めた。

3.4 DePaul 大学と長崎大学との COIL (GLE) 型授業の学習目標

本授業の主な目的は、1945 年以来発展してきた原爆に対する多様な物語の系統を理解することによって、広島と長崎に投下された原爆の、より完全な理解を得ることなどを目的とした。その意味で、本授業の目標は歴史の意味に関する決定的な結論を達成することではない。むしろ原子爆弾の複雑さとその周囲の問題の複雑さを理解するとともに、それと関連する問題に挑戦することや、それに因んだ問題にも批判的思考を適用するためのスキルを習得することなどを、本授業実践の目標としている。その意味では、本授業実践を修了するまでに、参加者は以下の作業について理解を深めることが必要としている。

- (1) 原爆投下前後の歴史的知識を理解する。
- (2) 関連する倫理理論と物語を識別し、最も影響のある理論と物語を示す。
- (3) テキスト購読とオンライン授業を通して、多文化の理解と会話力を獲得。

3.5 長崎大学と DePaul 大学との COIL (GLE) 型授業の全日程

本授業は表 2 で示されているように、全部で六回のセッションから構成されている。第一セッションと第二セッションの内容は日米間の原子爆弾の基本的な知識を理解するためのものである。また、第三セッションと第四セッションは日米間の倫理的・宗教的な観点からの原爆を理解することに重みを置いている。更に、第五セッションは核兵器を取り巻く現代のより複雑な問題を取り上げ、原爆との関連性を深めるように配慮している。そして最後に、第六セッションでは Zoom セッションを通して議論を重ねてきた日米の受講者たちが対面授業を実施し、多文化の理解と壁を学ぶように設計している。第六セッションではそれ以外にも現地訪問から学ぶ多文化のエクスポージャー型勉強を企画している。

4. ICT ツールと授業準備

4.1 DePaul 大学内の授業ツール

DePaul 大学では受講者の登録から評価までをすべて、D2L (Desire 2 Learn) に登録して行っている。今回は両大学の受講者が同じシステム上に登録され、授業の情報を共有している。日米の学生は D2L を通して課題図書を決め、同じ教材についてのディスカッションも行っている。この D2L システムは事前申請が必要であり、DePaul 大学の受講生はもちろん、長崎大学の受講生も同時に受講者として登録を行っている。次項に、D2L の登録から情報の参照までの内容を詳述する。

4.1.1 受講者の登録

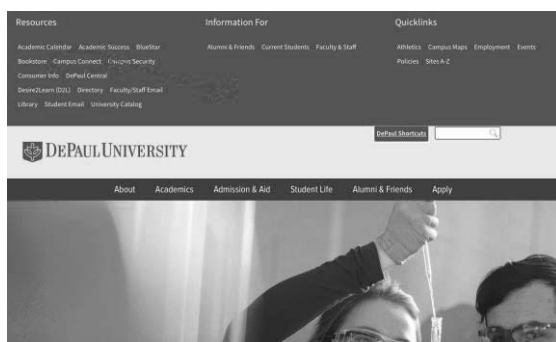
DePaul 大学にはすべての講義の受講者登録サイト D2L(Desire 2 Learn: D2L) が用意されている。そのサイトは DePaul 大学のホームページ (www.depaul.edu) から行い、下図 (1(a)) の右上にある DePaul Shortcuts に入用を意している。さらに、下図 (1(b)) 画面の左側にメニューが用意されており、メニューの中から Campus Connect を選ぶ形となる。最初のアクセス時にはシステムが用意されたパスワードの期限が切れ、アクセスを実施した受講者からの再設定が行われる。

4.1.2 受講システムの利用³⁾

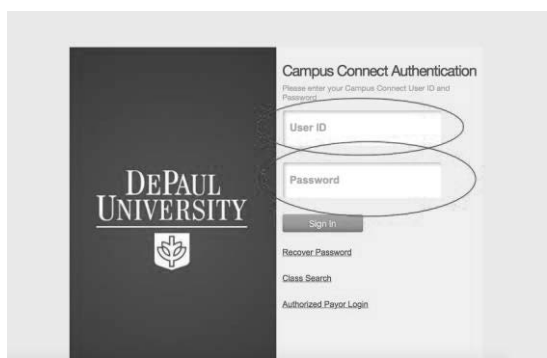
DePaul 大学の受講者システムに登録が完了すると自由にシステムへのアクセスが許可される。受講者が設定した新しいパスワードから D2L へアクセスするためには、最初の DePaul のホームページから DePaul Shortcuts をクリック、その中に表示される D2L : Desire 2 Learn (図 2(a)) へアクセスする。引き続き、要求される ID とパスワードを入ると講座のアイコン (Moral Issues Across Cultures-2018-2019 Autumn) が図 2(b) のように表示され、そこからアクセスが可能となる。D2L の授業ツールには様々な機能が用意され、D2L へアクセスすると様々なメニュー (Course Home, Content, Discussions, …) が用意されている (図 2(c)) ページが表れ、Class List を選択すると本授業のクラスに登録された全員の名簿が表示されるようになる。



(a) D2L の入り口



(b) 授業資料サイト

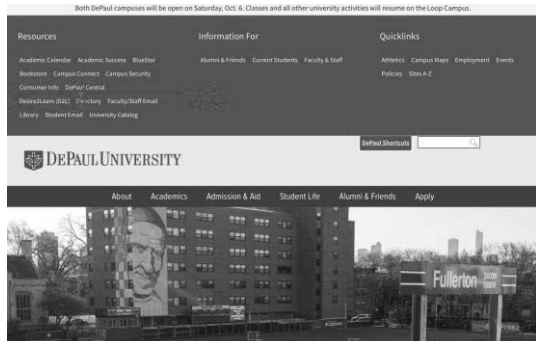


(c) ID とパスワードを入力



(d) 授業資料サイトへ

図 1 DePaul が用意した D2L サイトへのアクセス

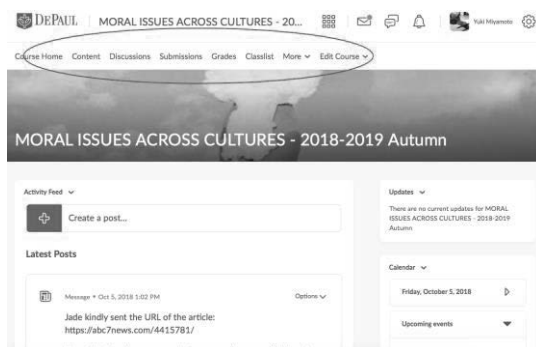


(a) メインページから D2L の入り口

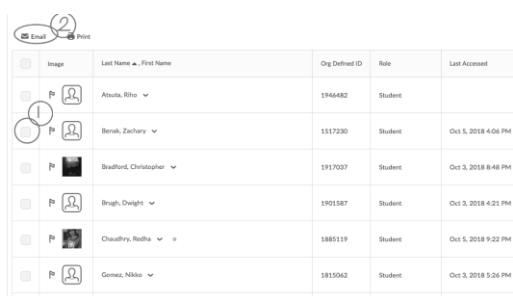


MORAL ISSUES ACROSS CULTURES -
2018-2019 Autumn
REL_202_750_1020

(b) D2L 授業資料サイト



(c) D2L のメニュー



(d) 情報交換ツール

図 2 授業資料サイトの利用方法

本講義のための受講ツールには一般的に用意されている①授業資料の観覧はもちろん、②受講者同士の情報交換が可能となっており、例えば、メールなどでお互いに情報交換をするときには、図 2(d)で表示された連絡したい相手の名前の横にあるボックス (1) をクリックして、リストの上の Email のアイコン (2) をクリックする。複数の相手に一度に一斉メールを送りたいときは、名前の横のボックスを複数選択することによって行われる。

4.2 長崎大学での授業実施内容

4.2.1 Zoom によるオンライン授業

前述の表 2 に示されているように、セッション 1 からセッション 5 まではオンライン上での授業が成立される。その中でも、DePaul 大学が用意している授業支援システム D2L を用いている授業があり、それは第一セッションと第三セッション、そして第四セッションの三つのセッションである。もう一つは Zoom によるオンライン上での授業が成立する第二セッションと第五セッションの二つが計画されている (表 2 を参照)。D2L による授業はそれぞれの大学が自らの授業として実施するもので、長崎大学では特別に授業時間を設けずに、各自、D2L にアクセスすることで実施することになっている。



(a) Zoom 授業に参加する長崎大学の学生



(b) Zoom 授業の全体様子



(c) DePaul 大学からの映像 (PC 側)



(d) DePaul 大学からの映像 (電子黒板側)

写真2 Zoomによるオンライン授業の様子

更に、Zoomによるセッション（第2セッションと第5セッション）は設備が整った教育学部の第二PC室で行った。写真2はZoomにアクセスし、オンライン上でのZoomによる授業を示している。システムの構成はZoomがインストールされているPCと音声を大きく出せるスピーカ、それから受講者の声を拾うマイクで構成されている。また、長崎大学の受講者にDePaul大学の受講者の映像が分かりやすく写るように、画面が広い電子黒板を用意している。

4.2.2 長崎大学での対面授業

長崎大学で実施した対面授業は、表2の最後の第六セッションで計画されたもので、全部で16名のDePaul大学の学生と引率教員の2名が長崎を訪問して参加した。長崎大学ではボランティア授業として受講者を募り、教育学部だけではなく環境科学部、水産学部、多文化学部などの他学部からの学生、大学院生たちに参加を呼び掛け、全部で8名がDePaul大学の授業システムであるD2Lに登録している。インストラクターとしては教員が1名参加する形となった。しかし、対面授業当日に参加した日本の学生の数はD2Lに登録した8名よりも多く学生たちが飛び入りで参加を果たした。



(a) 世界遺産の軍艦島を紹介



(b) 長崎・平和学習の実施・討論



(c) 両大学の学生同士の議論



(d) 両大学の学生同士の懇親の時間

写真3 長崎大学での対面授業の様子

対面授業では①長崎の世界遺産となっている軍艦島を、軍艦島の住民から紹介する時間（写真3 (a)）、②長崎の平和教育の一例としてビー玉による原爆の恐ろしさを音で示すものや、統計からみられる日本の平和教育の現状を紹介する時間（写真3 (b)）、③これらの授業の内容を話題とし、両大学の学生同士で議論をする時間（写真3 (c)）、④対面授業が終わってから、日米の学生たち同士の懇親を図る時間（写真3 (d)）として編成された。

両大学の学生による対面授業は Zoom のスクリーンで知り合った学生同士の初対面からスタートしており、二つの講義からなる話題提供により長崎独特の語りと平和への思い、原爆に対する継承内容などを確認することで実施された。また、その後の英語による議論と懇親では忌憚のない意見をお互いに出し合い、対面授業の良さを十分に発揮できた。

5. COIL (GLE) 型授業の特徴と課題

今回、COIL (GLE) 型授業の日米大学同士の授業実践を実施した。計画から実施までの準備時間が短かったものの、両大学のインストラクターとして参加をした教員同士はお互いに訪問授業等で長い付き合いがあり大きな問題にはならなかつ

た。また、DePaul 大学では定期的な授業として、今回のような授業が継続的に実施された来ており、その意味では授業内容に不備はなかった。今回の実践授業を以下のように総括し、その特徴と課題を整理しておく。

(1) COIL(GLE)型授業の特徴

- ・ ネットが繋がるオンライン上で成立する授業である。
- ・ 国際化、グローバル化に相応しい授業形態である。
- ・ 異なる多文化理解及びレディネスを育む授業として注目される。
- ・ ICT ツール (D2L システムや Zoom など) による授業実施が可能である。
- ・ 対面授業は教育効果が大きく、COIL (GLE) 型授業の力を発揮できる。

(2) COIL(GLE)型授業の課題

- ・ D2L のようなシステムの有無が授業のメリットでありデメリットでもある。
- ・ 日米間の Zoom による授業には時差問題が大きく、工夫の余地が残る。
- ・ 対面授業の効果はあるが出費が大きく、費用対効果に工夫が必要である。

広島・長崎を代表する核兵器の問題は今世紀の最大の課題であり、特に、若者への理解を深める授業作りはこの時代の重要なミッションである。また、核兵器の問題は日米間の問題に留まらず、近年は核実験が続いた朝鮮半島の緊迫した情勢にも関心が高まってきている。例えば、朝鮮半島の 38 度線上で日米韓の若者が核問題を学び、議論する授業があっても良いのではないか。最後の被爆地として長年平和を訴え続けてきた長崎の地において、同じく日米韓の若者が核問題を学び議論するとともに、核兵器廃絶へのアプローチを提案する授業もあって宜しい。

COIL (GLE) 型授業はこのような国境を越えた形の国際的な授業作りに相応しいものである。ネットワークがこれだけ発達した中、ネットが繋がるオンライン上で成立できる授業として注目されている。今回の授業実践の経験から、この時代の日米の若い人たちの核問題についての興味と関心の高さ、更に、自分の世代において平和を作る人としてありたいと願う情熱に驚きを禁じえない。

最後に、長崎で行われていた日米間の対面授業時において、韓国からわざわざ授業見学に来てくださった、韓国・延世大学の Dr. Tomoko Seto 先生にも感謝の意を表す次第である。関心の高い研究者達とともに、日米韓の三カ国の COIL (GLE) 型授業が実現できること切に願う。

参考文献

1. <http://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/index.html>
2. https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/___icsFiles/afieldfile/2016/10/06/201610ikedakeiko.pdf
3. <https://www.depaul.edu/Pages/default.aspx>